

平成 29 年度 自己点検・自己評価表

大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園

1. 本学の建学の精神

“桃李不言下自成蹊” とうりものいわざれどしたおのずからこみちをなす

「成蹊」の名称は、中国の司馬遷の『史記』に由来しています。「桃や李^{すもも}は何も言わないが、その美しい花や実^みにひかれて人が集まってくるので木の下には自然と小道（蹊）ができる」という意味です。

徳が高く、尊敬される人物のもとには徳を慕って人々が集まってくるというたとえです。

2. 本園の教育目標

強く 明るく 考える子ども

3歳児 喜んで 幼稚園へ来る子ども

4歳児 友だちと なかよく遊べる子ども

5歳児 力いっぱい 遊びやしごとをする子ども

3. 今年度重点的に取り組む目標

1. 教育活動

① 幼児の立場から

保育の主体は幼児であることを踏まえ、幼児が自分らしく、生き生きとして日々を過ごし、自己充実できるよう努める。

そのためには、まずは日々の生活の中での幼児の実態を見つめ、何が課題と考えられるのか、また保育をする上で何が求められているのかを見極めていくことが必要である。さらに、幼稚園教育の基本は環境を通して行うことであり、環境構成を考える視点として、どの幼児にも分かりやすい・使いやすい等の優しい環境であることに重点をおきたいと考えている。幼児の実態を把握しながら幼児と共に生活を創り出す保育実践に努めていく。

② 教職員の立場から

幼児が安心して思う存分に遊べる安全で豊かな環境構成に努める。また、幼児の主体性が育まれていく保育の教材や遊具を、幼児の思いを感じ取りながら準備していくようにする。更には、一人一人の幼児がもっている個性や発達の特性を見極め、教員間の連携を密にしながらその幼児に合った指導を行うことを大切にする。

2. 教員研修

① 園内研修

研究テーマに沿った研修・人権教育研修 を年間計画のもと、教員間で協議を深め、実践を振り返り、改善点や改善の方法について考える機会をもつ。

② 教育課程、指導計画の見直し

平成30年度から施行される新幼稚園教育要領の改訂の趣旨を理解し、趣旨を踏まえた視点から教育課程・指導計画を見直し、改訂をする。

3. 大学・短大との連携

学部、学科との交流をより活発にしながら、各々の専門性を保育に取り入れ、幼児・保護者・教員の豊かな学びに繋げていきたい。また、幼児教育学科保育専門分野の教員と協力して「保育研究会」を立ち上げ、幼稚園の教員と短大教員が、幼児期の教育について話し合い、幼児理解をより深めると共に、これからの幼児教育について考える機会としたい。

4. 安全管理

園内では教職員の連携体制を強化し、避難訓練は勿論のこと、平常時においても安全意識を高めて幼児の安全確保に努める。また、保護者との共通理解や連携を深め、いざという時には冷静にすべての幼児の命を守る体制をつくっていく。

4. 評価項目の達成及び取り組み状況

(評価結果はABCの3段階評価としています)

	評価項目	結果	取り組み状況
I	<p>教育活動</p> <p>①学園の建学の精神や、園の教育目標を踏まえ、幼児が主体的に、生き生きと充実して生活できるような保育の創造と実践に努める。</p> <p>②幼児の発達や育ちの姿を適切に読み取り、どの幼児も安心して遊べる、一人一人に寄り添った関わりや環境構成を考える。</p>	B	<p>取り組んできたこと</p> <p>幼児が主体的に活動するために、幼児の思いに添った教材や遊具等の準備を丁寧に行なっていく。また、環境構成においては、すべての幼児に分かりやすく、扱いやすい、ユニバーサルデザインの視点をもって工夫してきた。幼児が興味、関心を湧き立たせ、自ら関わっていきたくなる保育の在り方を、園内研修の場で意見交流を活発に行ない、深めていった。</p> <p>今後の課題</p> <p>幼児が何を思い、求めているかを的確に読み取る教師の力量が問われていることを痛感した。日々、幼児に寄り添いつつ、幼児の発達や生活の流れを踏まえながら、実態に即していくことの難しさをと向き合いながら、幼児が充実して生活できるよう研鑽を積むことの必要性を感じた。</p> <p>取り組んできたこと</p> <p>幼児一人一人の興味や関心を捉えながら、その年齢に合った素材や遊具等の準備をしていった。そのことにより、遊びがより楽しくなったり、友達との繋がりが広がるきっかけになったりする場面も見られた。また、個別に支援を必要とする幼児に対しても、教員間での連携を細やかにとり、望ましい支援の方法を考えることができた。</p> <p>今後の課題</p> <p>幼児一人一人の育ちを読み取る力をつけていくために、教員が専門職としての意識をもち、さらに研鑽を積んでいかなければならないと感じている。また、幼児が安心して存分に遊ぶことのできる環境のあり方についても、登園してから降園するまでのあらゆる時間について深く考えていくことが必要であると感じている。</p>
II	<p>教員研修</p> <p>① 園内研修の充実 研究テーマの視点から、幼児の姿を捉え、実践事例研修として協議を行い、幼児理解を深めていく。</p>	A	<p>取り組んできたこと</p> <p>昨年度までの研修を受け、今年度より「幼児の主体性が育まれる保育の創造 ～ユニバーサルデザインを視点にした環境構成～」をテーマに、実践事例研修を中心に進めてきた。幼児が主体的に活動していると感じる場面を捉えてその時の周りの状況や背景などを掘り下げ探っていった。教員間で意見交換をしたことで、自らの保育を振り返ると共に、「主体性」をどのように考えるのか、を一人一人の教員が考える機会となった。</p> <p>今後の課題</p> <p>今後の研修を積み重ねていく上で、「主体性」や「主体的」などの言葉の意味をどう定義するかを考える必要があると考える。今年度の研修を基にして、次年度当初には一定の定義をしていくように進めていくことが必要ではないかと思われる。</p>

	② 教育課程・指導計画の見直し 新幼稚園教育要領を踏まえ、これまでの教育課程と指導計画を改訂する。		<p>取り組んできたこと</p> <p>期ごとに幼児の実態と内容を照らし合わせ、より幼児の生活に添ったものにしていった。さらに、平成30年度より施行される新幼稚園教育要領を踏まえて、新たな幼児教育の動きを取り入れた内容へと見直すことができた。</p> <p>今後の課題</p> <p>次年度より、改訂した教育課程や指導計画をもとに保育を行っていく。実践の中で、幼児の実態にそぐわない内容や加筆する必要がある場合は、教員が個々に書き留め、次の見直しに活かしていく。</p>
III	<p>大学・短大との連携</p> <p>大阪成蹊大学、短期大学との連携を強め、保育についてじっくりと話し合い、幼児教育に対する考え方を共有する。</p>	A	<p>取り組んできたこと</p> <p>保育内容の充実を目指し、学部や学科の教員と幼児教育について共に考える機会「保育研究会」を年3回行なってきた。幼稚園教員と短大教員が幼児の姿をもとにして意見交換をすることで、互いの視野が広がり、幼児の姿の捉え方や関わりについての考え方が豊かになっていったと感じる。</p> <p>今後の課題</p> <p>今年度の内容を踏まえ、2年目の進め方として、幼児の実態から考えることを基本としながら、意見交換がより活発に、内容の深いものとなるような取り組みの方法を工夫していく必要があると思われる。様々な角度から幼児の姿を読み取り、意見交換をすることを通して「教育観」や「幼児観」などを共有することに繋がっていくことを目指したい。</p>
IV	<p>安全管理</p> <p>教職員が協力・連携をして、幼児の安全を守る体制を強化する。また、保護者と共に連携体制を再確認し、すべての幼児の命を守るという意識を高めていく。</p>	A	<p>取り組んできたこと</p> <p>避難訓練に関する年間計画を立て、教員と幼児・保護者も共に、など様々な状況を想定して訓練に取り組んできた。保護者と共に取り組んだ大地震発生時の幼児引き渡し訓練では、ほとんどの保護者が参加し、年々安全に対する意識も高まってきていることを感じた。</p> <p>今後の課題</p> <p>大地震など大災害発生時に、園内で幼児が長時間待機する必要になった場合の備蓄品(食料品・衣服・衛生用品など)の準備が整っていない現状がある。管理場所や物品の選定など、具体的に取り組んでいく必要があると思われる。</p>

5. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

1. 平成30年度から施行される「新幼稚園教育要領」の趣旨やその内容を理解していくことが、大きな課題であると意識してきた。まずは、個々に研修会に参加したり、参考文献を集めたりするなど、自主的に学んでおくように努めてきた。

基本的に、本園で行なってきた保育が大きく変わることはないが、小学校へのなめらかな接続が意識され、繋いでいくものが明確にされてきた。それらを意識しつつ、幼児期に必要な体験を、タイミングを逃がすことなく、自然な形で取り入れていくことを改めて考えておくことが、今後の課題である。

2. 今年度より取り組みが始まった「保育研究会」は、幼児教育学科教員との関係をより深く、強くするものとして今後も継続していく貴重な機会であると捉えている。短大での教員養成の立場と幼稚園という幼児教育の現場の連携は、附属ならこそ実現できることであり、大阪成蹊学園の特色のひとつとして位置づいていくことを目指していきたい。

6. 今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
保育の「質」を高める実践	「幼児の主体性」に着目し、保育実践を見つめ直していく。幼児が「やらされる」のではなく自ら「やりたくなくて」遊びに取り組む、そのような保育の実現をめざして、環境構成の視点から、具体的方法を見出していく。
教員の保育力向上	幼児の主体性が育まれる保育を実践する教師自身が、「主体性」をもって幼児と向き合っているか。幼児にとって楽しい、思わずやってみたくなる教材や遊具の開発に自主的に取り組んでいるのか。など、自らの姿勢を問いながら取り組んでいく。
学内連携の推進	短期大学幼児教育学科及び大学教育学部との連携をさらに深めながら、保育研究会の内容をより充実させていく。また、学生の教育実習、体験学習なども積極的に受け入れ、学生の指導を担っていく。
安全体制の充実	大きな災害が発生し、幼児が園内に留まらなければならなくなった場合の備蓄品、などについて、現実的に検討、準備を進めていく。

7. 学校関係者の評価

評価委員・幼稚園教員（園長・教頭・教務担当・研究担当）出席のもと、各学期ごとに学校関係者評価委員会を行った。委員会では「教育活動について」「教員研修について」「学園や諸機関との連携」等を柱に、幼稚園から幼児や保護者の様子、教職員の取り組みの経過と成果及び課題を報告した後、評価委員より意見や助言をいただくなど、評議の場を設けた。

今年度の総合的評価としては概ね良好であり、今後一層の保育内容の充実を期待する旨の意見を得た。主として以下の内容が挙げられた。

1. 教育活動について

子どもを取り巻く環境を整えることを意識した保育が実施されており、生き生きとした子どもたちを目にする。理想的な取り組みをこれからも継続することを期待する。

2. 教員研修について

幼稚園教育要領の改訂を受け、内容を確実に理解するために基礎に戻って理解する必要がある。今後も様々な研修等に積極的に参加することで、質の高い保育の実現を目指し、より研鑽を積むことが求められる。

3. 学園や諸機関との連携について

附属幼稚園ならでの連携を十分に発揮することが必要であり、幼児教育学科、教育学部との研究会でお互い刺激し合いながら、教育力を高めていく上で高く評価できる。芸術学部との連携については、方向性をきちんと示す必要がある。

4. 安全管理について

避難訓練については、綿密な計画がされており、保護者も参加することで意識を高めていることは高く評価できる。あらゆる事態を想定し、常に安全に対する意識を持ち、すべての大人が連携して子どもたちを守るようにしていきたい。